

# 滝洞遺跡

辰野高等学校敷地

1986

県立辰野高等学校  
辰野町教育委員会

## 序

この報告書は、長野県辰野高等学校の校舎改築事業に伴っての、テニスコート造成予定地において実施された、緊急発掘調査した報告書であります。

今回調査を行った滝洞遺跡は、辰野高校西側上方の楡沢山山麓の傾斜地に位置し、眺望の良い所にあります。この周辺には他にも多くの遺跡が存在しており、今回はその中の一つである滝洞遺跡の調査を行いました。

今回の調査では、調査対象区域内に34のグリッドを設定し試掘を行い、その結果遺構が確認されたグリッドをさらに拡大して調査を行いました。その結果、縄文時代中期の遺物や中世の遺物が出土し、又中世の古銭二枚も出土しています。遺構としては、中世の住居址一軒と、これと同時代と思われる掘立建物址が確認されています。これにより、この地域は中世の主要な遺跡であることが確認できたことは、大きな成果でした。

辰野高校では引き続き、61年度、62年度と改築工事が予定されており、これに伴って発掘調査を行う事となっています。これらの調査によってこの附近の中世の様子がさらに明らかになる事を期待するところであります。

今回の発掘調査は12月という非常に寒い時期に行ない、調査団長を務めていただいた、友野良一先生をはじめ、調査作業員の皆様には大変な苦勞をおかけしましたが、皆様をはじめ、地元の方々や辰野高校の関係者の御協力により、無事調査を終了し、この報告書を刊行できましたことに心から感謝申し上げます。

昭和61年3月

辰野町教育委員会教育長 小林 晃一

# 例 言

1. 本報告書は昭和60年度に実施した、辰野高等学校のグラウンド造成に伴う、埋蔵文化財の緊急発掘調査報告書である。
2. 本事業は辰野高等学校より辰野町教育委員会が委託を受け実施した事業である。
3. 本報告書の実測図は図面に図示してあるとおりである。
4. 本報告書の執筆者及び図版作製者は次のとおりである。
  - (1) 本文執筆 友野良一・林 康彦
  - (2) 図版作成 友野良一
  - (3) 写植撮影 三浦孝美・友野良一
  - (4) 本報告書の編集は教育委員会がおこなった。
  - (5) 遺物の保管は辰野町教育委員会。

## 目 次

序	
例 言	
第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘に至るまで	1
第2節 調査の組織	1
第3節 発掘調査の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	3
第1節 遺跡の位置	3
第Ⅲ章 遺構と遺物	6
第Ⅰ節 調査の概要	6
1. 遺構	7
2. 遺物の包含状態	11
図 版	12
所 見	20

## 挿 図 目 次

第1図 滝洞遺跡	3
第2図 序 層	3
第3図 滝洞付近の遺跡分布図	3
第4図 滝洞遺跡付近の地名	4
第5図 滝洞遺跡	6
第6図 平面図	7
第7図 1号住居址	8
第8図 柱穴址	9
第9図 滝洞遺跡土層堆積状態	10

## 図 版 目 次

図版1 滝洞遺跡	12
図版2 滝洞遺跡周辺	13
図版3 滝洞遺跡遺構	14
図版4 マウンド・発掘状況	15
図版5 グリッド出土遺物	16
図版6 グリッド出土遺物	17
図版7 グリッド出土遺物	18
図版8 古 銭	19

## 第 I 章 発掘調査の経緯

### 第 1 節 発掘調査に至るまでの経過

昭和60年4月、辰野高校より校舎改築に伴う発掘調査について、辰野町教育委員会に依頼したい旨の連絡があり、ついでに4月26日、県文化課の職員が来校するので、現地協議を行いたいとの連絡があった。当日現地で協議を行った結果、町教育委員会で発掘を受託する事となった。

昭和60年12月、辰野高校と辰野町教育委員会との間で「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結し、ただちに調査を開始した。

### 第 2 節 調査の組織

#### ○辰野町教育委員会

教育委員長	林	立	郎	
委員長代理	田	代	大	二
委 員	加	島	康	男
”	赤	羽	篤	
教育長	小	林	晃	一

#### ○滝洞遺跡調査団

団 長	友	野	良	一	(日本考古学会会員)
調 査 員	赤	羽	義	洋	(辰野町教育委員会)
調査補助員	林	康	彦	( ” )	
”	三	浦	孝	美	( ” )

### 第3節 発掘調査の経過

月 日	
12 2	調査を開始する。午前中は作業員の休憩所の設置と、器材、道具等の運搬及び設置する。 重機において桑の木の抜根を行ない、午後、抜根のできた所から、グリッドの設定を行なう。
12 3	重機における抜根を引き続き行い、ほぼ終了する。グリッドの設置を行なうと同時に、試掘を行なう。
12 4	重機により表土の除却を行ない、グリッドの発掘を行なう。
12 9	住居址1基、柱穴址1を確認、他のグリッドにおいては、記録と写真撮影を行なう。
12 11	確認できた遺構について、グリッドの拡大を行なう。
12 16	遺構の調査を行ない、柱穴、炉址及び祖母壇の破片一片を発見する。
12 19	遺構の記録を行なう。
12 20	記録、写真等の作業をすべて終了。
12 21	午前中、テントや道具類の片付けを行ない、現場での作業をすべて終了。
1 20	報告書作成作業を行なう。
3 10	報告書の作成作業を終了。

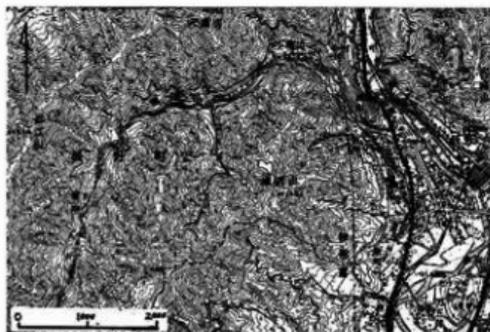
## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の位置

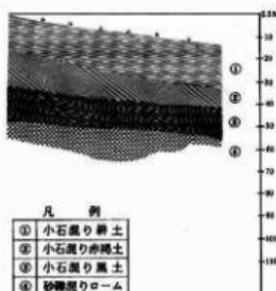
滝洞遺跡の地理的位置は、長野県上伊那郡辰野町大字伊那富3602-1番地を中心とした一帯に分布している遺跡である。標高は754～780m、傾斜角度は9度～12度東南に傾斜している。この一帯は滝洞のほか大洞・シヨブ沢・小洞などの扇状地で、現在畑地である。本遺跡に至るには国鉄辰野駅より西方約2km、国道153号宮木より200mの所に所在している遺跡である。

### 第2節 地理的環境

本遺跡は、木曾山脈中北部地帯に属し、この附近の山では楡沢山1248.66mの東麓に当り、洪積世の地質年代から幾度か自然的な影響を受けてきた所である。楡沢山の東面は北に大洞・シヨブ沢・小洞・梨洞・楡沢など大小の沢によって作られた扇状地に位置している。これらの沢から流れ出る水が宮木附近の水田及び工場などの用水として使用されてきた。遺跡の東は辰野高等学校があり、この丘は古い河岸段丘になっていて、その東段丘下は国道153号線が通っている。現在辰野町の中心地は、この東一帯に集中している。



第1図 (×印) 滝洞遺跡



第2図 滝洞遺跡地層

### 第3節 歴史的環境 (第3図)

1. 滝洞遺跡附近にある遺跡は、41楡沢山麓(縄文・平安)、43上の山遺跡(縄文)、44久保田遺跡(縄文・平安)、45月丘の森遺跡(平安)、46前田遺跡(縄文)、48天狗坂遺跡(縄文)、50新町富士浅間遺跡(縄文・平安)、52泉水遺跡(縄文)、222富士塚北遺跡(縄



第3図 滝洞付近の遺跡分布図

文)、223 滝洞遺跡(中世)、224 南湯舟遺跡(縄文・平安・中世)、225 北湯舟A遺跡(縄文)、北湯舟B遺跡(縄文)、230 仮宿遺跡(平安)などの遺跡が分布している。特に山麓の小沢の出口に平安・中世の遺跡の多いことは注目されることであることに注意したいものである。今回調査の対象となった滝洞遺跡からは、分布調査時には中世の遺物が発見されたに過ぎなかったが、縄文中期・縄文後期・近世の遺物までが発見され、いっそう歴史の広さを教えてくれた。

## 2. 滝洞附近の地名

本遺跡は、地名のうえでは滝洞口という地名になっているが、一般的には滝洞と呼んでいるので、滝洞遺跡と名命したようである。滝洞地籍の中程を滝洞の沢があり、小河岸段丘をなしている。今回調査した北側には城館址の堀ではないかと推定される堀込がある。また辰野高等学校の体育館のあたりに古くは堀があったと言われている凹地があり、その凹地を利用して西天竜が通ったと言われている。

その東側辰野高等学校の敷地は段丘上であり、一見城館址風に見受けられる場所である。この久保田地籍は梨洞と小洞の作った凹地で、黒土の堆積が多くやや湿地帯である。この湿地帯を利用して武井製系工場にシヨブが沢より用水を引いたと云う。久保田の西山麓には一段高い所があり、そこを要害とよばれ中世の地名を思わせるところがある。楡沢の南現在辰野病院の附近であるが、サンゲナシという地名がある。古くは懺悔(ざんげ)キリスト教で、罪悪を自覚し、これを告白し悔い改めること、さんげと云っていることからきたサンゲか、この「ナシ」は理解に苦しむところである。一部墓地となっているが、何か意味がありそうである。サンゲナシの西に泉水という地名がある。これは泉のことだろうと考えられる。その西側に、「木戸脇」と呼ばれている地名がある。木戸脇は「木戸」の脇であるが、この附近に「木戸」が設けられていたことと考えられる。「木戸」というのは豪族の屋敷の木戸を差すことが多い。また「駅」にも「木戸」と云う地名がよく残る場合がある。このような地名は宮木宿や、宮木にあった城館址に関係した地名であったかも知れない。それから久保田や滝洞口の東側には、元町・町裏・中村通りなど、宿場町にちなんだ地名がある。宮木は東山道も通った所でもあり、宮木の宿もあった所として、意味の深い地名といえる。町裏の東には前田という地名があるが、おそらく中世豪族の屋敷の前の田の意味であろう。前田の南に「神田」なる地名が見えるが、古い神社の祭田ではなかろうか。その南に「平蔵」という地名があるが、人



第4図 滝洞遺跡附近の地名

名か、あるいは、この地方の蔵か、これも意味がありそうな地名である。また、マセロなる地名もある。これは牧場のマセロと解せられる地名ではなかろうか。辰野町には「平出ノ牧、宮所牧、小野ノ牧、辰野牧」など多くの牧の存在する所であるので、マセロなる地名は重視したい地名の一つである。そのほか、元町の東に藤ノ木、セリ田などの地名があるが、中世によくある地名であるので注意しておきたい地名である。町裏の北には「仮宿」なる地名があり、心を温めてくれる地名で、宮木・宮所が、古代～中世～近世にかけ一つの拠点であったことは確かであるので、仮宿なる地名のもつ意味に魅力を感じるものである。

### 第三章 遺構と遺物

#### 第1節 調査の概要

今回の滝洞遺跡の調査に当っては、分布調査の成果から、中世城館址の周辺に当る遺跡として注目されていた遺跡であることが、調査のきっかけになったことはゆがめられない事実であった。それから傾斜12度の急勾配の扇状地にどれだけの遺構が存在したか、それは大変疑問に思っていたことも事実である。しかし、再度表探の結果縄文中期後葉の遺物や縄文後期の遺物迄採集されたことには驚かされた。しかしながら、今回の調査区域からはこれらにかかわる遺構は発見することはできなかったが、この附近にはこれら遺構が存在することは、たしかであると考えられる。今回は堅穴の中世の住居と、同時代の柱穴址が調査できたことは、何よりの発見であった。また、時期不明であるがロームマウンドの検出も収穫であった。またそれに最初のねらいの中世の遺構と遺物の発見は、今後この附近の調査が重要であることを十二分に教えてくれた。



第5図 滝洞遺跡

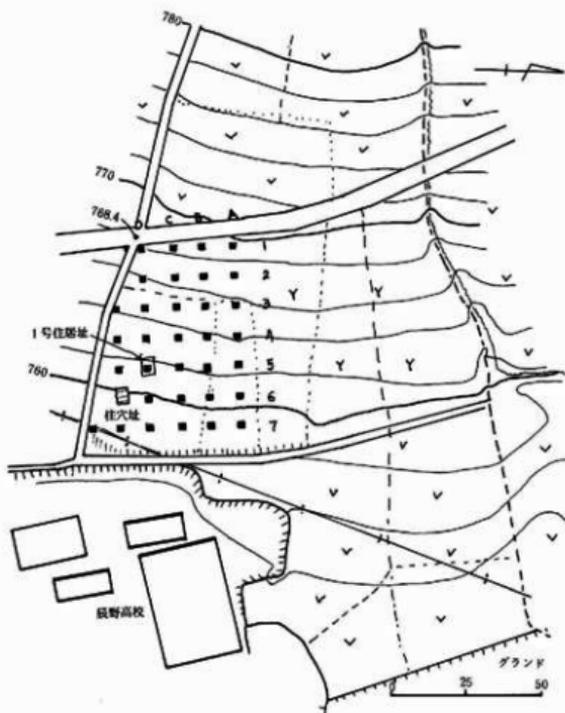
## 1. 遺 構

### (1) 第1号住居址(7図図版)

住居址の規模は東西5m、南北4.2m、深さは西壁で1.5m東壁で約80cmと急斜面に作られた住居址である。

柱穴と考えられるピットはP.1、P.2、P.5で、そのほか柱穴に該当する位置には検出できなかった。他のピットは補助柱穴ではないかと考えられる。

そのほか、壁外にも多くのピットが発見されているが、これらのピットは、建物の構造上から田屋柱と想定されるピットではないかと考えられているものである。炉址は東側に設けられていて、形態は地焼炉と考えられる炉址である。炉の周辺はそうとう広く焼土があったところから、そうとう長い間使用されていたものと思われる。床は西



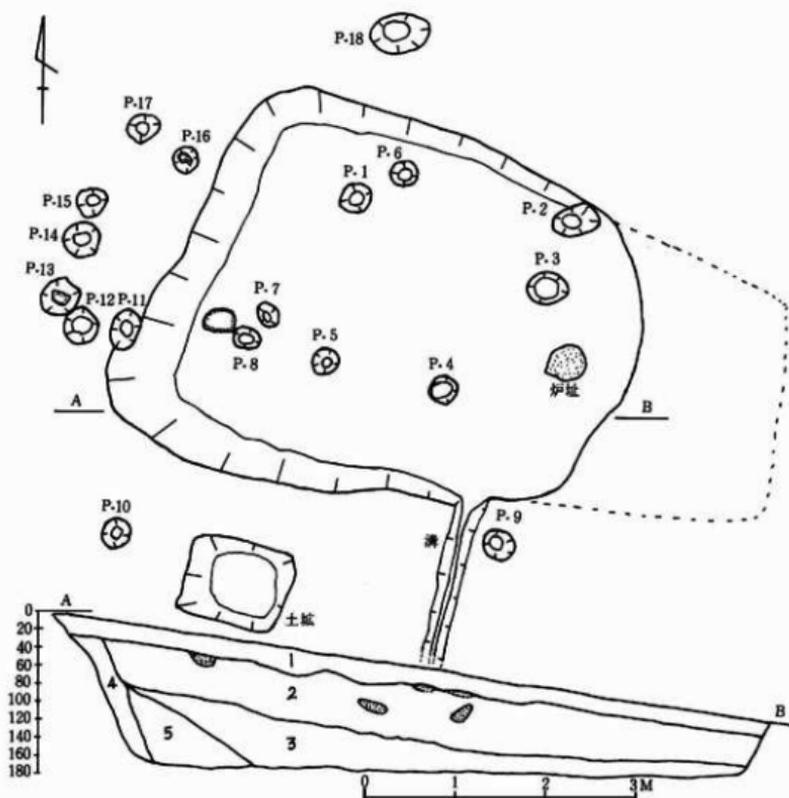
第6図 遺構配置図

側がよく踏みかためられていたが、東側はやや軟弱気味であった。特に東壁は軟かく一部不明確な箇所もあった。

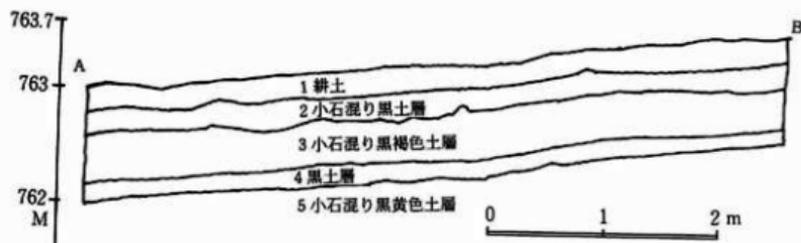
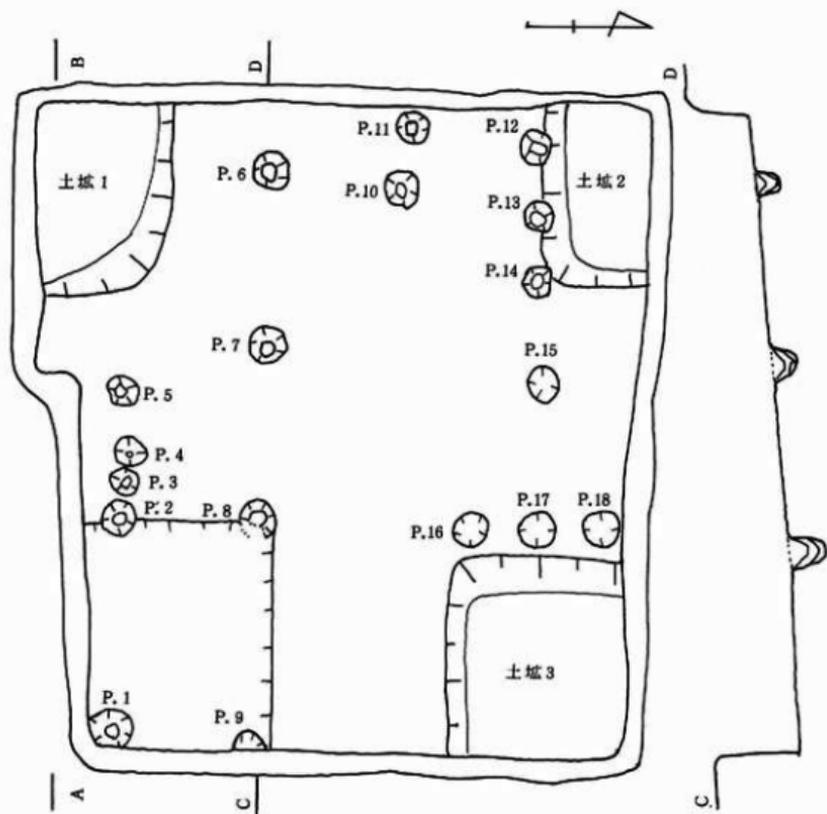
・出土遺物、本住居址からの出土遺物は、床面から発見された、祖母懐(ソボカイ)の壺の破片のみであったが、この祖母懐の壺の出土で、16世紀前半の遺構であることが証明されたことは、今回の調査の最大の収穫であったと思う。今迄辰野高校の敷地が中世の居館址ではないかと言われてきたことを意味付ける資料になったことと思われる。

(2) 柱穴址(8図図版) 本址は、E-6グリッドを調査中に発見されたものである。今回の調査では柱穴の全体を調査することができなかったので、柱穴址の規模などを明かにするに至らなかったが、主柱穴及補助穴を合せて18個発見することができた。柱穴間隔はC-Dの断面では1.5

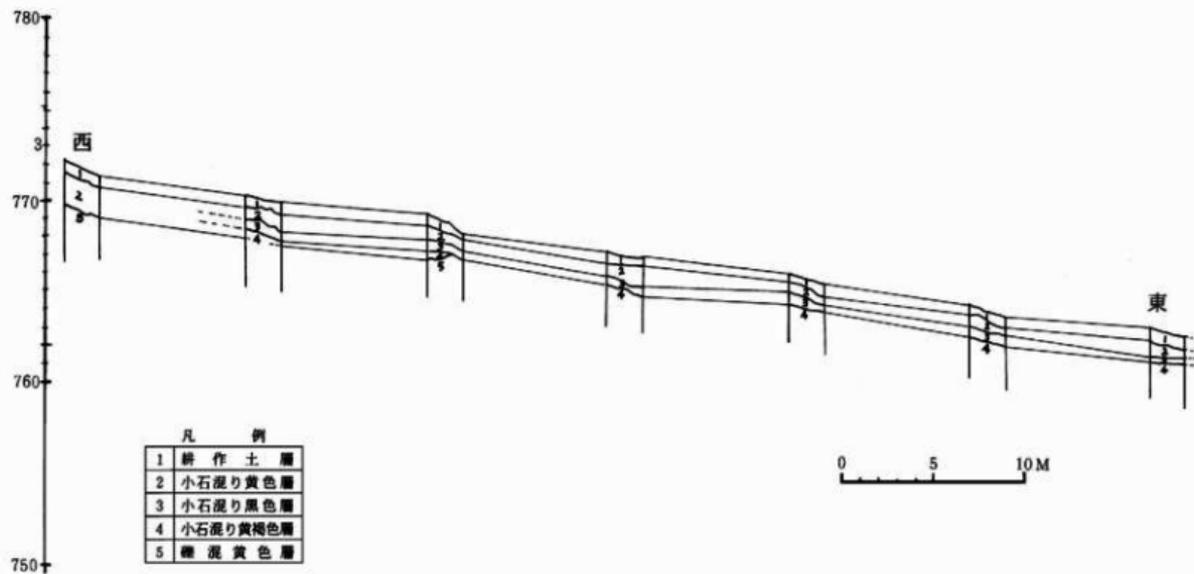
m～1.6 mの等間隔であるが、そのほかの柱穴間隔は一定ではないので、建物の性質を知ることができなかった。柱穴の断面には黒色土層の落込により柱穴であることを確認できた。調査のできた広さ東西6 m南北5 m、本址内に土竪が3箇所発見された。土竪1は、柱穴位の西南の角に検出されたもので、規模1.5 m×1.2 mであるが外側にのびているようである。土竪からは永楽通宝が出土した。土竪2は北西の角に発見されたが、これも北と西に拡張されるので規模は不明である。土竪の周辺に穴が検出されたが、土竪との関係はよくわからない。土竪3は東北の角に検出されたもので、この土竪の両側にも穴が検出されている。遺物は発見できなかった。本柱穴址からはP.8から内耳竈の破片と土竪1から永楽通宝が出土しているので、時代は16世紀代と考えられるものである。



第7図 1号住居址



第 8 圖 柱穴址



第9図 滝洞遺跡土層堆積状態

(3) マウンド C-7グリッドに発見されたもので東西1.5m、南北75cm、高さ35cm程のものである。遺物が伴なわないので時期不明である。

(4) 土層の堆積状態(第9図) 土層は主に調査坑の北壁と西壁とを実測したが、表示したのは北壁にとどめた。本遺跡の地層は楡山の堆積層である。基盤に達するのは推定20m以上と推定されているので、その間は堆積層と見なされるものである。第1層耕土層で20~40cmの小礫混りの黒土層。第2層は小砂礫にロームが混った赤褐色で、堆積は20~50cm。第3層は12~20cm黒褐色土層で、この土色は上部よりの浸透によって生じたものと言われている。第4層以下砂礫混りの黄褐色の層である。今回はこの第4層で調査は止めた。一部5層に達した調査坑もあり、この地層は礫がやや大きく黄色となる。ソフトロームは、1号住居址の床面で検出できた。この面の標高は760mである。このあたりから傾斜がゆるくなってゆく。

## 2. 遺物の包含状態

遺物、表探による遺物は縄文中期土器1片、縄文時代の棒状石器2個、土師器片2、中世の内耳鍋破片6、近世陶片15片などが出土した。

- ・A-1グリッドからは、縄文後期の土器片8個、内耳鍋の破片2、江戸時代の陶片1が2層から出土した。
- ・B-7グリッドからは、内耳鍋の破片1片、戦国時代から検出された。このあたりは黒色の土層が次第に深くなってくる。
- ・C-6グリッドからは、中世末と思われる内耳鍋の破片1、近世末頃の陶片1などが発見された。
- ・D-2グリッドの3層上部から縄文中期後葉の土器片1、D-3グリッドから縄文中期後葉の土器片1と江戸期の染付1片、D-6グリッドからは中世末期の内耳鍋の破片4、スリパチ破片1、染付の破片1、江戸時代のが発見された。出土した層位は1~2層中である。
- ・E-6グリッドの1~2層からは内耳鍋中世末2片が発見された。また、E-7グリッドからは中世末の内耳鍋の破片7個が検出された。
- ・F-7グリッドからは、内耳鍋の破片1、安南銭、治元聖宝(唐代)が3層の黒色土層中から発見された。(図版8-17)

そのほか、1号住居址の床面から祖母懐の壺の破片が発見された。この祖母懐の壺は美濃妻木の古窯の製品ではないか、時代は16世紀前葉砂土窯の時期と考えられる。妻木古窯の近くを仲馬街道が通っているので、仲馬街道によって運ばれたものではないか。(図版6-7)

また、柱穴址の柱穴P-6の上部からは図版5-6の内耳鍋の底部に近い破片が出土した。17世紀代のものと推定されるものである。そのほか土坑1から永楽通宝が検出された。この永楽通宝は中国の元の22年(1403)~(1424)年までであるが、我国でも長祿頃に鑄造されている。(図版8-18)。



図版1 上=滝洞遺跡 下=滝洞の南要害



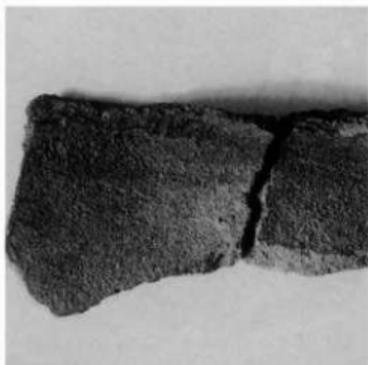
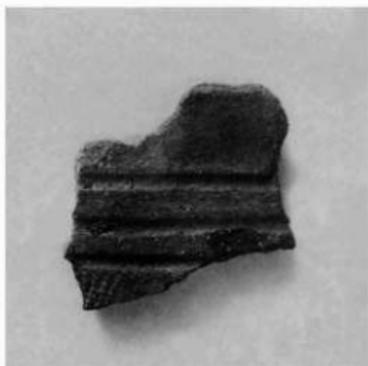
図版 2 上=滝洞遺跡より辰野高等学校グラウンドと辰野町  
下=滝洞遺跡より辰野高等学校校舎と遠方平出方面



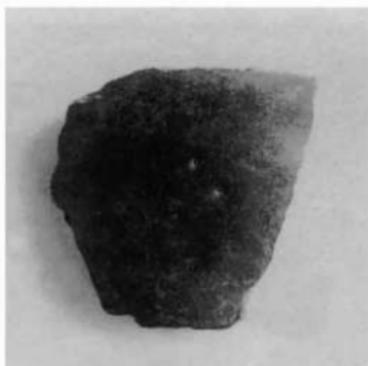
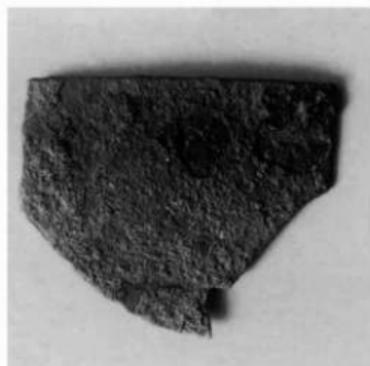
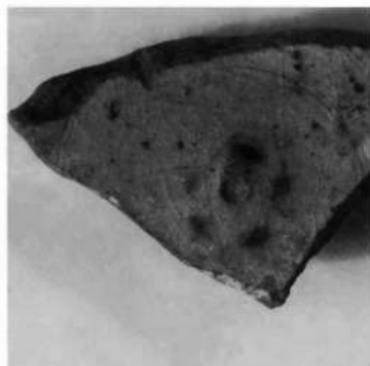
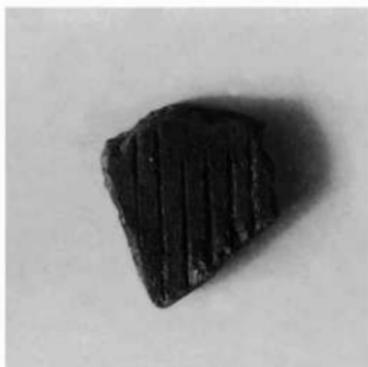
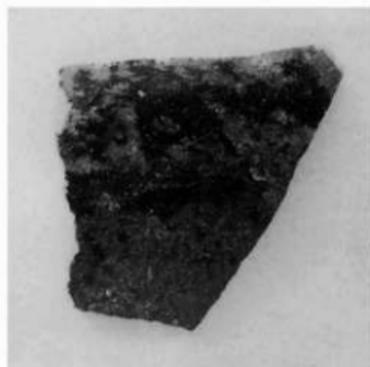
图版3 上=1号址 下=柱穴址



図版4 上=1号マウンド 下=1号址発掘状況



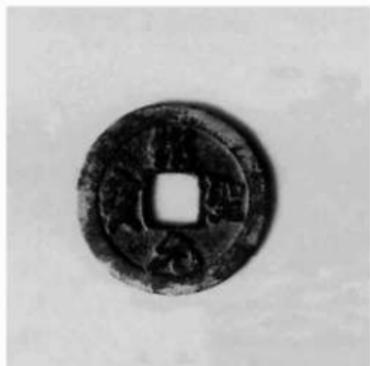
図版5 1. 表探 2. D-3グリッド 3. D-2グリッド 4. A-6グリッド  
5. E-7グリッド 6. E-6グリッド(柱穴址)



図版 6 7. 1号址出土陶器 8. D-7グリッド 9. 表探  
10. 表探裏 11. F-7グリッド 12. 表探



図版 7 13. 表採石器 14. 表採石器 15. 表採石器  
16. D-7グリッド, 集痕文土器



图版 8 17. 古钱 (安南钱治元圣宝) 18. 古钱 (永来通宝)

## 所 見

今回の調査によって得られた成果は予想以上のものがあつたが、ここではその中の主要と考えられる二、三の点について所見を述べたいと思う。

調査の内容については前章で詳しく述べてあるので省略する。

1. 本遺跡の自然的な環境について述べると、滝洞遺跡は楡山の東麓にあたり、横川川の形成した右岸段丘上に位置する。標高は760～780mに分布する。遺跡は楡山の小谷が作り出した扇状地で、東南に10～12度の傾斜をなし、745m附近からは傾斜がゆるくなり、この地点あたりより中世の遺構が分布するようになることに注目される。

2. 本遺跡は地質的には天竜層の上端部が764m附近にあり、そのレベルにソフトロームの層が見られるところから、それ以上は楡山の小谷から流出したロームを含んだ砂礫の堆積層であることが確認された。

3. 現在のところ遺物の分布状況から縄文中期後葉の遺物より古い遺物は発見されていない。そのほかの遺物は縄文後期、須恵器・土師器と中世～近世の遺物が発見された。

4. 住居址は今回は第1号住居址だけであつたが、760mラインには今後中世の住居址が分布することが予想されるし、この標高より東段丘上に至る間は特に注意しなくてはいけない所と考えられる。

5. 今回の調査では中世末の住居址を検出することができたことは、特に注目されることの一つである。中世の住居址はこの地方に於いても発見例が少ないが、本遺跡の様な例もあることから、今後中世の遺跡の調査に当っては、いろいろの条件を想定して調査に当ることが必要であることを教えてくれた。また柱穴址についても、この程度の傾斜でもあきらめることなく調査することが大事であることも教えてくれた。

6. 今回の調査地点より東傾斜地を含めて段丘迄の間には各時代の遺構が存在することが考えられる一つの目安が出来たので、今後の調査の参考になったと思われる。

7. 辰野高等学校の敷地は、環境的にみても、地名的にみても、中世豪族の居館が設けられても不思議でない所であることから、今後開発が行われる所には特に注目される所だと思われる。また、宮所の堀内繁氏所蔵の古文書保科分限帳の「上伊那拾三騎」に樋口七郎兵衛門、他有賀、小糸、平出、辰野、矢嶋などの武士の名が見える。また、「矢島勘兵衛百石宮木住、右秀吉公御代大阪御殿守御普請之節横川口木奉行私款ニ付改易」とある古文書から、辰野高等学校附近に矢嶋氏の居館があつたのではないかと考えておられる方もあるところからも注目すべきところだろう。また、古文書に、「宮之上、山岸、下林下、中村、宮ノ下通に少々御座候由」とあり、また「元町に家居十六軒御座候」とあり、天和2年頃の宮木宿の様子を窺うことができる大変重要な古文書が残っている。今回の調査はこれら宮木宿前後の歴史を知る貴重な調査となつたことと思われる。

調査に参加下さった方々12月の寒さの中熱心に調査されたことに衷心より感謝申し上げます。  
友野良一